

砥部と鶯歌 交流活発



砥部分校の陶芸室で記念撮影に収まる鶯歌区訪問団と同校の生徒・教員ら

訪問団、砥部分校や窯元視察



※砥部焼販売協同組合提供資料を基に作成

と林椎義さんが、砥部焼の粘土でろくろを回して制作を体験。陶芸員たちは器の延ばし方の違いに興味深そうに見入った。人は砥部の土について軟

訪問団は曾明華・鶯歌区長をはじめ、陶芸家や鶯歌高級工商職業学校の関係者ら総勢20人。23日は砥部分校で、茶道部生徒から抹茶の接待を受けた。陶芸室で職業学校生徒の郭品好さん

産業・文化・教育 地域の発展に期待

らかく、きめ細かい」と口をそろえていた。24日、一行は砥部焼の原料となる陶石の採掘場所を視察後、龍泉窯とスギウラ工房を訪れ、訪問団の王弘良さん(陶芸教室講師)と、龍泉窯代表の池田富士夫さん(伝統工芸士)は約2カ月の滞りを経て、2025年12月、王さんが砥部町に約2週間滞在し、龍泉窯で技術交流を過ごし、今年1月には池田さんが鶯歌に王さんを訪ねた。王さんは「池田啓介准教授(考古学)と池田さん

が登壇。大正期から現在までの台湾陶芸界と砥部焼の関係を双方で確認した。池田さんはその後、鶯歌区で現地陶芸家と人脈を開拓するなど砥部と鶯歌は頻繁に行き来する関係になっていく。交流を積極的に推進する砥部焼販売協同組合の泉本明英理事長は「焼き物の技術、学術・文化、教育、行政など幅広い分野で交流が深化することで期待の活性化につながれば」と期待している。

砥部焼まつりあすから

伝統と創造性、個性あふれる砥部焼が一堂に集まる春恒例の第41回砥部焼まつりが18、19の両日、砥部町千足の町陶街道ゆとり公園で開催される。約10万点が通常価格より割安で購入できる大即売会、カフェ、絵付け体験、台湾スイーツ販売

など多彩な催しがあり、大勢の人出でにぎわいそう。18日は午前9時〜午後8時、19日は午前9時〜午後5時。主催は砥部焼まつり実行委員会(町、砥部焼協同組合、砥部焼販売協同組合、町商工会、愛媛新聞社)。



スイーツ「愛玉子」いかが 台湾ブースお目見え

砥部焼まつりでは野外テントに、台湾スイーツの愛玉子(オーキョーチー)「写真」や台湾茶を味わえるブースが出店する。

愛玉子は、台湾に自生する植物の種子を使って作り、ゼリーのようなぷるぷるとした食感が特徴。300円。

台湾新北市鶯歌区の陶芸家・蘇正立氏の器販売や、砥部町と鶯歌区の交流を紹介するパネルコーナーもある。



砥部の粘土の感触を確かめながら器を制作する郭さん(手前)と林さん

訪問団カメラスケッチ



陶芸家として互いを認め合う池田さん(右)と王さん

砥部分校茶道部の接待を受け、抹茶を体験する訪問団



砥部焼の陶石採掘場所を視察する訪問団(松永公一さん提供)



戦前台湾に砥部焼出荷

愛媛大植林准教授 関係性を調査研究

日本が統治していた戦前の台湾に砥部焼が出荷されていた歴史がある。

1927(昭和2)年1月3日付の海南新聞(愛媛新聞)の台湾に砥部焼が出荷されていた歴史がある。

同社の社史「梅山窯のあゆみ」には28(昭和3)年の台湾との取引明細書が資料として収められている。愛媛大学社会共創学部の植林啓介准教授「写真」によると、梅野商会が出荷していたのは磁器碗(わん)で、取引店は台湾全土で約75店もあった。

近年、台湾の考古学界では日本統治時代の発掘調査が進んでおり、植林准教授が台湾の研究者と交流する中で、台湾と砥部焼の関係が明らかになってきた。植林准教授は、戦前、台北市の北西に北投焼という窯場があり、砥部焼を模倣して磁器碗を作っていた可能性がある」と語る。「台湾研究者の間では以前、出土物が北投焼なのか砥部焼なのか区別がつかなかったが、砥部の資料と付き合わせて違いが判別できるようになってきた」といふ。

戦後、産地が北投から鶯歌に移転、陶工も移り住み鶯歌焼になった。「染付文様構成など日本の磁器の雰囲気を受け継いでいる。碗の大きさも北投焼や現地に出荷していた砥部焼と同じ」と植林准教授。「台湾の窯場と砥部の関係性をさらに調べたい」と意欲を見せている。

製造	庭園用	内地向	台湾向	貿易向
水盤盛花	庭園用鶴	内地向	台湾向	貿易向
伊豫崎伊豫郡砥部	梅野春吉	梅野鶴市	梅野商店	神戶販賣所
電話二二七	電話二二七	電話二二七	電話二二七	電話二二七
伊豫崎伊豫郡砥部	伊豫崎伊豫郡砥部	伊豫崎伊豫郡砥部	伊豫崎伊豫郡砥部	伊豫崎伊豫郡砥部

1927年1月3日付の海南新聞に掲載された梅野商会の広告

陶芸塾 技と文化継承



古谷崇洋町長メッセージ 伝統とモダン体感して

毎年県内各地から多くの方にお越しいただきありがとうございます。約10万点もの作品が一堂に集まるこの2日間は、砥部町が1年でもっとも盛り上がる2日間です。「伝統的な藍色の染付はもちろん、若手作家によるモダンな作品まで、砥部焼の「今」を体感していただけるラインアップをご用意しました。国の伝統的工芸品である「砥部焼」は2027年に磁器創業250周年の節目を迎えます。来年へのステップアップを目指した初の試みとして、台湾スイーツや台湾茶を楽しむブースや、町外の方々に向けた「ふるさと納税」による砥部焼購入クーポンなど、より多くの方に楽しんでいただける企画を充実させていきます。

お気に入りの器との出会いを探し、「ご家族・ご友人と誘い合わせのうえ、ぜひ砥部町へお越しください。皆さまの笑顔にお会いできることを、心より楽しみにしております。



春の砥部を彩る「第41回砥部焼まつり」が、今年も盛大に開催されます。



陶芸塾を修了した15期生6人

3月23日は15期生6人の修了式が町役場であり、講師陣が見守る中、受講者が古谷崇洋町長から修了証を受け取った。濱家ひろさ(左2)・砥部町は松山南高校砥部分校陶芸コースの

いる。当初は単年度だった「じっくり教えた」という講師の要望などを踏まえ13年度から2カ年になった。盆と正月を除く平日6時間という濃いカリキュラム。実習内容は、スリム、絵付け、釉薬(ゆうやく)、石こう型、焼成など。伝統工芸士らが講師を務め、「一生きた技」を伝授する。

て成形する「たたこ」がメインになるといいます。新しい挑戦をスタートさせた2人は、共に「将来は独立して自分の窯を持ちたい」と目標を掲げている。

講師の一人、芥川正明さん(工界芥川、伝統工芸士)は「多くの修了生が砥部焼に関わっており、陶芸塾は産地の維持に大きく貢献している」と評価。修了者に対しては「やる気のある方は、いい物を作れるようになるには長い時間がかかるが、技術を磨いて砥部焼活性化の力になってほしい」と温かいエールを送っている。

修了者の7割 砥部焼従事

砥部焼は2027年、磁器創業250周年を迎える。砥部町は砥部焼の技と文化を次代に継承し、新しい造形やデザインを創造できる人材を育てようとして「砥部焼陶芸塾」を開講している。これまで修了者72人のうち、開業した24人を含む7割以上の55人が砥部焼関係の仕事に従事。陶芸塾は地場産業を支える大事な役割を担っている。



修了式に出席した陶芸塾講師陣

卒業生。「売り物にできるよ、自分の技術のクオリティを上げるすべを塾で学んだ」と充実した表情。3月から町内の窯元で働いており「多くを吸収して力を付け、窯元に貢献したい」と語る。

橋本芽育さん(20)は松山市も砥部分校出身。集中して技術を高めたいと受講した。「先生によつて、多くの使い方が違って、自分に合った方法を見つけれよかったです」と笑顔。4月から働く町内の工房では、粘土を板状にスライスし、型に当てるとして

「好みの品見つけて」「若い人も楽しめる」まつり大使PR

「砥部焼まつり大使2026」の一色涼花さん(29)は主婦。新居浜市、写真真しと中村華凛さん(21)は松山大学4年。砥部町、同右も、18日に始まるまつりを笑顔でPRする。

一色さんは砥部焼は、ぼつりして丈夫な手作りの温かみがあるのが魅力と話し、まつりの呼び物・大即売会について「会場をじっくり巡りながら、器を手に取り、お



「人脈の広がり大きい」OB増田さん「青花窯」代表

砥部町大南で「青花窯せいかよ」を営む増田明弘さん(50)も砥部焼陶芸塾OBだ。「技術を教わるだけでなく、人脈が広がるのが陶芸塾のよいところ」と強調する。

増田さんは松山南高校砥部分校を卒業し、町内の窯元(就職30歳のときに)から学び直そうと思い立ち受講した。当時を振り返り「講師の先生がオープンな方で、積極的に技術を教えてくれた」と感謝している。

とりわけ、砥部焼の唐草模様を生みの親として知られる上藤百治さん(19年死去)と親しくなれたことが大きかったという。「独立後も気軽に質問できるように、今に生きている」

まつりは、全国から陶芸ファンが訪れることから、増田さんのように、今年の増田さんの売れ筋傾向をつかむ貴重な「市場調査」の場。「ちょっと実験的に作った物も加えてみたい」と積極姿勢を見せている。

「青花窯は工藤さんが命名した。親類の空き家を改修した作業場、日々制作に励む。作風はオーソドックスな白磁に呉須(すず)が基本。「シンプルで飽きの来ない器をつくり丁寧に作るよ心がけている」と語り、砥部焼まつりの大即売会でも販売する。



メンを回し難々と作品作り打ち込む増田さん



まつり最大の目玉行事・大即売会は、町陶街道ゆとり公園の体育館で開催。約50軒の窯元が食器や花器など約10万点を通常価格の2〜3割引きで販売する。6,600円までの購入で、砥部焼を各自先着千個プレゼントする。

体育館2階では人気の絵付け体験(500円から)を今年も実施。素焼きの器に思い思いの絵柄を描き、焼成後の受け渡し。

野外テントの「カフェE BOUT(エボット)」では、好みのマグカップで飲み物と焼き菓子を楽しめ、マグカップは持ち帰りができる(各自先着50人、2800円)。

木のおもちゃコーナー「木育がこ(こ)」(武道場)のほか、砥部町のイメージキャラクター「とべこ」など県内(当地)キャラクター

会場案内

伊予鉄バス 松山市駅から約40分「砥部新橋口」または「砥部大岩橋」行きに乗り「砥部町役場西」下車、徒歩約15分

JRバス JR松山駅から約40分、「久万高原」行きに乗り「砥部町中央公民館前」下車、徒歩約15分

△砥部焼まつりの問い合わせ先

砥部町商工観光課 089(962)7288、まつり期間中は089(907)5711

アクセス

■車 松山市街から国道33号を高知方面に約30分、松山インターチェンジ(1C)から国道33号を高知方面へ約10分。陶街道ゆとり公園と町役場に無料駐車場



その場で寄付して砥部焼ゲット 現地決済型ふるさと納税

砥部町は砥部焼まつり期間中、大即売会会場(体育館)前に「現地決済型ふるさと納税」のブースを設ける。その場でスマートフォンから寄付すると、大即売会会場内で使える紙クーポン=写真(見本)一が発行される。購入した砥部焼が実質的に返礼品となる形だ。

対象は砥部町外に在住する来場者で、寄付5千円につき、1500円分の紙クーポンを発行す

る。

2027年に磁器創業250周年を迎える砥部焼は、陶石を採掘する町内唯一の業者が25年に受注を停止し、産地として存続の危機に直面している。町は「砥部焼250年目の『命綱』プロジェクト」と銘打ち今年2月、企業版ふるさと納税の募集を始めた。現地決済型ふるさと納税は同プロジェクト第2弾の取り組みで、今回初めて導入した。

町地域振興課ふるさと創生係によると、企業版と併せ集まった寄付金は、砥部焼協同組合など関係団体の支援に充てる。同係は「伝統を次の100年につなぐため、来場した全国の砥部焼ファンにぜひ応援していただきたい」と話している。

問い合わせは、同係☎089(962)7250。

広告 企画・制作/愛媛新聞社営業局